

中国人日本語学習者による使役の意味処理過程に関する研究

—理解と産出に着目して—

北京日本学研究センター 狄燕 (DIYAN/てきえん)

本研究は、中国人日本語学習者を対象に、理解と産出との両過程に着目し、使役に関する意味機能の習得状況を考察するために、文法性判断テスト、確信度判断テストと選択式テストを用い合わせて調査を行った。本研究において、使役の意味機能（以下は機能）は、強制、許容、誘発、因果、他動詞相当との5機能に分類された。107名の調査参加者は、学習年数（以下は学年）により、1学年群、2学年群、3学年群、4学年群との4群に分けられた。考察の結果、学習者による許容度は機能間に、確信度は機能間と学年間に、産出の正用率も機能間と学年間に有意差が認められた。具体的な結果をまとめると、以下の通りになる（>は有意に高い、<は有意に低い、=は有意差がない、有意水準5%）。

(1) 理解の許容度:

- a. 機能上: 強制 = 誘発 = 他動詞相当 > 因果、誘発 > 許容
- b. 学年上: 有意差なし

(2) 理解の確信度:

- a. 機能上: 誘発 > 許容
- b. 学年上: 1学年群 < 3学年群 = 4学年群、2学年群 = 3学年群 = 4学年群

(3) 産出の正解率:

- a. 機能上: 強制 > 因果 > 他動詞相当、強制 > 誘発 = 他動詞相当
- b. 学年上: 1学年群 = 2学年群 < 3学年群 = 4学年群

以上の分析結果より、理解と産出の両過程において、学習者による使役の意味習得は機能、学年によって影響されることが確認された。教育現場における使役の文法教育に関して、理解と産出を区別せず、一回で一斉に導入ずみという固定形式を考え直し、理解と産出分けて、機能別と学年別に、文法指導を行うべきであろうか。